

東欧諸国におけるリュミエール映画の受容

—シネマトグラフの世界的浸透〈その2〉—

永 治 日 出 雄

Hideo NAGAYA

(ヨーロッパ文化選修)

I オーストリアにおけるリュミエール映画の受容

1890年代のウィーンは東ヨーロッパにおける学芸の中心として世紀末の華麗な文化を開花させていた。オーストリア＝ハンガリー二重帝国の皇帝フランツ＝ヨーゼフ一世は1857年首都ウィーンの大改造に着手し、中世以来の城壁を取り壊すとともに、旧市街を圍繞するリングシュトラッセを貫通させた。この環状道路に沿って国会議事堂、市庁舎、ブルク劇場、ウィーン大学が造営され、ホーフブルク王宮にも広大な美術史館と自然史博物館が増築される。1893年にホーフマンスタールが代表作『痴人と死』を、シュニツラーが処女作『アナトール』を出版した。1895年に科学哲学者マッハがウィーン大学に招聘される。フロイトが自己の医学療法に初めて精神分析の名をあてたのは1896年である。同じ年に建築家ヴァーグナーは郵便貯金局の工事を完成し、その翌年クリムトラの〈分離派〉は新しい美術運動を開始する。1869年に落成したルネサンス様式の宮廷歌劇場（現在の国立歌劇場）ではこけら落しに『ドン・ジョヴァンニ』を上演し、1896年『売られた花嫁』のウィーン初演によってスメタナが名声を確立した。同じ年に交響曲第3番を完成したマーラーは、1897年から宮廷歌劇場の主任指揮者兼芸術監督に就任する。⁽¹⁾

ウィーンにおけるシネマトグラフ一般公開は第1区ケルトナー通り45番地（クリューガー街1番地）の建物で1896年3月28日から開始された。グラン・カフェでの歴史的な一夕から3カ月後にあたる。リュミエール社の委託を受けたユジェーヌ・デュボンが、オーストリア初の興行を実施した。フランス大使館の一室であらかじめ試写を行ったあと、彼は50クロイツァーの料金で毎日午前10時から午後8時までシネマトグラフを公衆に披露した。フリッツの労作『オーストリアにおける映画—サイレント映画 1896-1930』には、同国のシネマトグラフ受容が簡潔に描かれている。⁽²⁾

興行が行われたケルトナー通りは、ウィーンきって繁華街であり、リングシュトラッセに面する宮廷歌劇場左脇から発し、古都の象徴とも言うべきサン・ステファン大聖堂へと至る。この目抜き通りには優雅な洋品店、楽器店、レストラン、ホテルが連なり、遊歩する紳士淑女をさまざまな趣向で呼び寄せる。ケルトナーリングに面したカフェ・シルク＝エツケやカフェ・シュヴァルツェンベルクは、学生や知識人のたまり場であって、ここでは文学談義や演劇批評が熱っぽくなされるとともに、ヨーロッパ各国のさまざまな雑誌が備えられていた。⁽³⁾

こうしてデュボンによるシネマトグラフ一般公開は、もっとも文化的な熱気に満ちた場所、宮廷歌劇場とカフェ・シルク＝エッケから至近の距離にあるケルトナー通り45番地で始められた。主要な部分を以下に訳出するのは、映写会場で配布された初期のプログラムである。そこに刷り込まれた記述の大半は、シネマトグラフの理学的な説明であるが、最上部に1896年4月23日との日付、末尾に上映作品6本が手書きで記されている。ただし、だれがこのプログラムを保持し、書き込みを施したかは詳らかでない。

(1896年4月23日)

毎 日 上 映

ウィーン第1区、ケルトナー通り45番地
(正面入口：クリューガー街1番地、中2階)
午前10時から午後8時まで

リヨン在住オーギュスト・リュミエールおよびレイ・リュミエール両氏の

シネマトグラフによって映写される

活 動 写 真

リュミエール氏の〈シネマトグラフ〉は精巧な器械であって、活動するさまざまな事象や、そうした事象に随伴する細部の動きを、写真によって感嘆すべき正確さで保持するだけでなく、それらを白いスクリーンに投射し、観客全員によく見えるよう、忠実に実物大で再現する。

したがって、この注目すべき発明のお陰で、現実の生ける事象を微細な部分にまで開陳することが可能となった。レンズを向ければ、いまや生をいつでも保存でき、すでに起ったあらゆる事柄を正確に再現できる。以前耳にした言葉が、エディソンの蓄音機をとおして同じ語調でふたたび聞えてくるのと同様である。〔中略〕

1秒間の撮影回数は15に及ぶ。したがって、1分間の出来事ひとつが900の写真に収められ、長さ18m、幅3cmのテープに組み込まれる。

以上のような器械のお陰で、さまざまな景観を再現することも可能となった。たとえば、歩行者、車馬、電車などが繁く往来する大通りや広場である。こうした撮影の拡張によって、動くものが焼きつけられ、さまざまな事象が驚くほど躍動的に投影される。

- | | | | | | |
|---|------------|---|-------|---|-------------------|
| 1 | パリのコンコルド広場 | 2 | 嬰兒の朝食 | 3 | 船での遊覧 |
| 3 | 鍛冶屋 | 4 | 海浜 | 5 | 列車 ⁽⁴⁾ |

デュボンによる一般公開は日刊紙『新自由新聞』によっても報道され、シネマトグラフの優れた映像が称讃された。これがオーストリアにおける最初の映画批評である。⁽⁵⁾この新聞は自由主義的な態度と堅実・慎重な編集を特色とし、イギリスの『タイムズ』と同じく一国を代表する日刊紙として知られる。なかでも『新自由新聞』の文芸欄は文学、演劇、音楽、美術に関して周到で信頼できる論説を記載するのが常であった。⁽⁶⁾

シネマトグラフに対する感嘆の声はホーフブルク王宮にまで達し、ケルトナー通り45番地の映写会場は1896年4月17日オーストリア＝ハンガリー皇帝フランツ＝ヨーゼフ一世の来臨を仰いだ。同日付けの『新自由新聞』はフランツ＝ヨーゼフ一世と〈活動写真〉の

出会いを以下のように報じる。

しばらく前からシネマトグラフによる〈活動写真〉がクリューガー街2番地の中2階で公衆に供されているが、本日正午畏れおおくも皇帝がこの映写に臨席された。皇帝は興行者デュボン氏に迎えられて、映写室に案内される。そこでは部屋全体が真っ暗にされ、白いスクリーンのうえに画像が投射された。シネマトグラフで撮影されたレパートリーの大半、水泳をする子どもたちで賑わう海浜、列車の到着、壁の取り壊しなどが上覧に供せられ、皇帝はこの美事な器械に強い関心を示された。これがリヨンのオーギュスト・リュミエールとルイ・リュミエールによって発明されたことは、よく知られている。この器械によって私たちは1秒間に15回の撮影を行い、1分間の出来事ひとつが900の写真に包摂できる。そして、これらの写真によってそうした出来事の多様な過程と微細な動きが全体として再現される。皇帝とデュボン氏の会話はフランス語で行われた。皇帝の到着と退去の際にクリューガー＝ケルトナー通りは人波で溢れた。⁽⁷⁾

1848年に即位し、在位50年に近いフランツ＝ヨーゼフ一世は、毎日5時に起床し、署名や謁見のため日々8時間以上もの精励を続けた。謹厳な皇帝は伝統や作法を重んじ、電話、電灯、汽車、自動車など技術的な発明に拒否反応を示したという。シネマトグラフへの関心とケルトナー通りへの来臨は、王家として異例の対応であったに違いない。1889年マイアリングにおける皇太子ルドルフの自殺は、ハプスブルグ家に暗い影を落していた。1897年シャン＝ゼリゼのパリ慈善バザールにおいてシネマトグラフの映写会場が炎上し、皇后の実妹であるアランソン公爵夫人が不慮の死を遂げる。国民から敬愛されていた皇后エリザベート自身も、その翌年ジュネーヴのレマン湖畔で無政府主義者に刺殺された。⁽⁸⁾

1896年4月号の『ウィーン画報増刊』には、プログラム変更の予告が掲載されている。新たに組まれた番組は、①『工場の出口』、②『嬰兒の朝食』、③『広場のとき屋』、④『喧嘩』、⑤『壁の取り壊し』、⑥『ニースのカーニヴァル』、⑦『列車の到着』である。ウィーンの観客をとくに惹きつけたのは、近代的な工場の情景や異国のカーニヴァルであったらしい。⁽⁹⁾デュボンによる興行が開始されてまもなく、リュミエール社の主任映写技師プロミオは助手ヴェルシングルとともにウィーンを訪れた。また、リヨン生まれの映写技師アンリ・ギャビヤも1896年5月1日から翌年の11月末までオーストリア＝ハンガリア二重帝国に派遣される。オーストリアにおける最初の映画撮影はこれらリュミエール映写技師団によってなされた。ただし、リュミエール社が作成した目録によれば、オーストリアでの作品は『シネマトグラフ会場入口』および『リングシュトラッセ』の2点だけである。⁽¹⁰⁾

まもなく興行師たちがオーストリアの各地でシネマトグラフの巡業を始める。こうした旅芸人のひとり、ルイス・ジェニーはすでに1895年から巡回演芸を始め、幻燈を用いて幽霊芝居を見せていた。1896年彼はボヘミアのクラツォーで初めてシネマトグラフの映写に接する。その翌年トリエステで知り合った楽士は、パイプオルガンで巡回映画を効果的にしていた。フィラッハやザルツブルクで臘人形を見世物に供したあと、ジェニーは1899年冬に巡回映画で身を立てることを決意する。やがて彼はモラビアの小都市ツナイムでシネマトグラフの興行を始め、1906年までにクラゲンフルト、トリエステ、ブリゲンツ、ザンクト＝ガレン、等々を巡業した。⁽¹¹⁾彼の仕事を補佐した息子アルトゥールは、当時の巡回映画について貴重な回想を遺している。

1902年の冬頃には私たちのプログラムは相当豊富となり、新規の購入によってつねに殖えつつあった。ブリキ罐にフィルムをつめた荷箱が、パリのパテ・フレール会社から3週か4週毎に届いた。普通ブリキ罐の大きさは靴墨用の箱ほどで、丈もあまり高くはない。年毎に罐は大きくなる。これらの荷箱には以下のような内容の書状が添えてあった。「普通便で新しい映画作品を見本として送付します。これらのフィルムをご覧になり、不要とされる見本はご返送ください。それを受け取ってから、請求書をお送りします。』」⁽¹²⁾

1903年にウィーンでは3つの常設映画館が存在し、1907年にはテント小屋を含めて100となり、1915年には150に激増した。なかでも1906年マリアヒファー通りに建設されたシェッファール＝ハウスファール館は1階席、栈敷席、階上席に500の観客を収容できた。また、グラーツのアネン通りに建てられたエディソン劇場は、570の客席と横5メートル、縦4メートルのスクリーンを備えていた。⁽¹³⁾なお、オーストリア映画を初めて製作したのは、アントン・コルンである。ケルトナー通りの興行に啓発されて1896年の11月、ルイス・ヴェルテはコールマルクトの市立臘人形館でコルンの短いフィルムを上映した。コルンはヴェルテ家と親交があり、1900年頃から映画製作の準備を始める。こうして彼は1907年自国における最初の劇映画『階段から階段へ』を完成した。⁽¹⁴⁾

II ハンガリーにおけるリュミエール映画の受容

マジャール人を主体とするハンガリーでは、1526年オーストリアに併合されたのち、ハプスブルク家への抵抗運動が数世紀にわたって続けられた。1848年パリにおける二月革命の成就是ウィーンの学生や改革派を決起させ、ハンガリーでも愛国者ラヨシュ・コシュートの指導のもとに自治と独立の臨時政府を樹立させる。これに対してオーストリア宮廷は憲法制定議会の招集など自由主義的な革新を約束する一方、野心的な帝政ロシアや少数民族のクロアチア人と策応し、コシュートらの革命政権を挟撃・粉碎した。しかし、1867年に結成されたオーストリア＝ハンガリー二重帝国は、マジャール人に大幅な自治権を認めたものであり、不屈の闘争に対するハプスブルク家の譲歩であった。⁽¹⁵⁾

ドナウ河を隔てて対峙するふたつの都邑、中世以来の王宮と教会を擁するブダと、政治・経済・興行の拠点であるペストは1873年に統合し、19世紀中葉に12万であった人口が、1890年には56万と急増する。1894年ここでは亡命先のトリノで客死したコシュートの葬儀が盛大に営まれ、前後して国会議事堂、証券取引所、装飾美術館の建設も進められた。⁽¹⁶⁾

1896年の元旦ブダペスト全市には教会の鐘が鳴り響き、マジャール人建国千年祭の開幕を告げた。ペスト目抜きのエルジェーベト環状通りには重厚なロイヤル・ホテルが落成し、4月には館内のカフェでハンガリーにおけるシネマトグラフ初公開が行われた。千年祭の式典を謁見するため、フランツ＝ヨーゼフ一世がブダの王宮に到着したのは、同年の6月である。皇帝に伴なわれた王妃エリザベートは以前からマジャール人に好意的な態度を保ち、ハンガリーでも広く愛慕されていた。また、皇太子妃ステファニーは、コダック製カメラでしきりに撮影し、写真を見慣れぬブダペスト市民の関心を惹いた。⁽¹⁷⁾

当時作成されたリュミエール映画一覧のなかには、この際に撮影された作品が3点見出される。ハンガリー各地の代表団と連隊に護られた『皇帝のパレード』3点と、ドナウ河に築かれた典雅な『くさり橋』1点であるが、これらを製作した人物は示されていない。

リトー＝ユティネの調査によれば、1895年の歳末からスペイン、オランダ、ドイツを巡回した映写技師フランシス・ドゥブリエが、ロシアへの道程でワルシャワとブダペストに立ち寄っている。ただし、ロイヤル・ホテルでのシネマトグラフ初公開や建国千年祭の撮影にドゥブリエが関与したか否かは、やはり不明である。⁽¹⁸⁾

なお、イストヴァン・ネメスキュルティの著作『言語と映像—ハンガリー映画の歴史』には、映画の起源について興味深い史実が示されている。1896年の建国千年祭ではペスト東端〈市の森公園〉で開催された世界博覧会が人気を集め、600万人の観光客を呼び寄せた。祖国解放の先覚者を記念して公園の入口に英雄広場が建造され、園内の湖畔には中世風の城砦やパノラマ館とともに、エディソンのキネトスコープを見せる50平方メートルのホールが建設されていた。⁽¹⁹⁾また、かねてから幻燈や投影に強い興味を抱くハンガリー人は、この時点で初のドキュメンタリー映画を製作した、とイストヴァンは記述する。

スティクライ・アーノルドという利発な商人は、建国千年祭の際にフランツ＝ヨーゼフ一世の映像を撮った。皇帝が展覧会の開催を宣したあと、ムンカーチ・ミハーイの絵画『エッケ・ホモ』を凝視し、画家自身にお祝いを述べる映像である。この映画作品はすでに散失した。失敗作であった、とも伝えられる。というのは、商人みづからがカメラを組立て、アメリカ製のフィルムに穴を空けて、撮影を試みたからである。これが上映された劇場も消滅した。ロイヤル・ホテルにあったリュミエール映画館や1890年代にブダペストで開設された他の劇場と同じように・・・。⁽²⁰⁾

パリやウィーンと同じように19世紀末のブダペストには600軒のカフェが営業し、内外の情報や文化的な啓発を受ける場所となっていた。有名なカフェ・ニューヨーク、日本亭、カフェ・ロイヤルでは学者や芸術家やジャーナリストが作品の構想を練ったり、文章を書いた。⁽²¹⁾これらのなかで映画の普及をとくに促した店として、イストヴァンはカフェ・ヴェレンスを挙げる。

カフェ・ヴェレンスは喧騒なラコーツィー通りに位置し、現在そこにはチーザ映画館が建っている。このカフェにおいてハンガリー映画の歴史が始まった。〔中略〕

いまやカフェの店主はつぎのように客を誘った。「店に来て、お茶を飲み、商談を進め、友人と語り、新聞を読んでください。加えて毎日5時から6時まで私のところで映画を見せます。」当初これには顧客から追加料金を取らなかった。後になってカフェでは特別の部屋を設け、安価な入場料で映画を見せる。そこへはコーヒーよりも映画の好きな人々が来るようになった。そうした顧客とは小売業者、商人、店員、事務員、詩人、儲かった露天商であり、さらにはブダペスト発の近郊列車に乗り込むまで、時間をもてあます者も含まれた。このような人達の中核になって、映画の観衆は驚異的なまでに膨張した。

こうしてカフェ・ヴェレンスの店主ウンゲルライデル・モールはますます映画にのめり込んだ。席を移らなくとも、どこからでも見られるよう、ウェイターの主任ベッシ・ジョゼフが店の中央に白い布を垂らした。そして、自分で操作できるプロジェクターを机の下に置き、巻きフィルムを入れる籠を脇にして映写を始めた。

やがてプロジェクターを撮影・映写機に替えて、やはりベッシが熱心に操作した。この男こそハンガリー最初の映写技師である。

1898年にカフェの店主ウンゲルライデルは、演出家の経験を有するニューマン・ジョ

ゼフと共同でひとつの商社を設立した。プロジェクトグラフという企業名で知られるこの会社は、傘下の映画館にフィルムを調達したり、さまざまなプロジェクターとカメラの販売や賃貸を行い、外国の大手会社で製作されたフィルムを地方の映画館に貸出しもした。プロジェクトグラフは映画作品を調達し、映画館を支配したハンガリー最初の商社である。

20世紀初めの10年間この商社は、ニュース映画や教育映画も製作した。⁽²²⁾

ウンゲルライデルによって設立されたアポロ劇場は長い間ハンガリーで最大かつ最高の映画館であった。サーカス小屋を模したテント映画館も人気を集め、客引きに誘われた観衆で満ち溢れる。静かさを好む詩人や作家は、カフェを衣替えした小さな映画館に通った。1912年に存在した映画館はハンガリー全体で270、ブダペストだけで90と伝えられる。ジョン・ルカーチの好著『ブダペストの世紀末』に描かれたとおり、映画理論家ベラ・パラージュ、映画製作者アレクサンダー・コルダ、映画監督マイケル・カーチェスが育ったのは、このような文化的環境においてであった。⁽²³⁾

III ユーゴスラビアにおけるリュミエール映画の受容

19世紀後半のユーゴスラビアは、きわめて複雑な民族構成と社会状況を示していた。セルビア公国の君主ミハイロ・オブレノヴィチは1867年にベオグラードなどの主要都市よりトルコ軍隊を撤退させ、15世紀から続いたオスマン帝国の支配から脱却した。こうしてセルビア人は独立した王国を樹立し、1888年の憲法制定によって立憲君主制の道を進み始めた。ツェティニを首都とするモンテネグロ公国も、1878年にトルコ軍を打ち破り、実質的に独立する。しかし、イスラム教徒の多いボスニア＝ヘルツェゴビナ、サグレブを中心とするクロアチアはともにハプスブルク家の統治下に置かれ、東南端のマケドニアやセルビアの一部はなおオスマン帝国に支配されていた。⁽²⁴⁾

リュミエール映写技師団のひとり、アンドレ・カレは1896年5月30日ベオグラードに到着し、旧市街のホテル〈セルビアの王冠〉で旅装を解いた。その3年前若い国王アレクサンダル・オブレノヴィチが1888年憲法を破棄し、セルビアの政治は危機的な様相を呈していた。カレを補佐する技術者ジュール・ゲランとリヨンの商人ベルオラも翌月4日ベオグラードに着く。ベルオラはリュミエール社の委託人ないし代理人と思われる。こうしてバルカン半島における最初のシネマトグラフ公開は、この一行によって1896年6月6日由緒あるレストラン〈黄金の十字架〉で行われた。⁽²⁵⁾ 当日の催しは若干の誤りを含みつつ、ベオグラードの新聞『マレ・ノヴィーヌ』につぎのように報道される。

シネマトグラフ 本日よりレストラン〈黄金の十字架〉において類いなく偉大な発明、写真を用いたとは信じられない発明が、フランス＝リヨン在住のオーギュスト・リュミエール氏およびルイ・リュミエール氏によって披露される。これこそシネマトグラフと呼ばれるものである。ここではさまざまな種類の動きを示す生物や物体が眺められる。ここでは子どもが手足を動かしたり、列車が走行するのが眺められる。そして、これらがあまりにも生きいきと表現されるので、写真ではなく、現実を見ていると錯覚するであろう。⁽²⁶⁾

6月16日にはセルビアの国王アレクサンダルとロシア出身の母后ナターリが〈黄金の十字架〉に來臨し、リュミエール映画をつぶさに見た。ベオグラードにおける最初の興行は

同月18日に終了し、ただちにカレはルーマニアの首都ブカレストへ出発した。翌年2月にこの映写技師はふたたびベオグラードを訪れ、グランド・ホテルに滞在する。今回の興行では3日毎にプログラムが更新され、シャンゼリゼ大通りやバッキンガム宮殿やケルンの大聖堂の映像も新たに組み込まれた。1897年3月6日カレはユーゴスラビアにおける最初のフィルム『王宮から大聖堂に向かう国王陛下』を製作し、まもなく『テラジェ広場の停留所』と『タバコ工場からの労働者の退出』によって近代都市ベオグラードも映像化した。ただし、これらカレの作品は早くから散失し、ブカレストで撮影された『ルーマニアの国王・王妃とその護衛隊』が現存するのみである。総じてオーストリア＝ハンガリーとバルカン半島で製作されたリュミエール映画は、きわめて少数しか残っていない。⁽²⁷⁾

ユーゴスラビアではこの時期にベオグラード以外の諸都市で別種の映写会がいくつか行われた。クロアチアの首都ザグレブでは1896年10月8日サミエル・ホフマンがエディソンの製作と思われるプロジェクターで観客を集めた。その地方では古代ローマの遺跡で知られるプーラでも、ホルネイという人物がみずから製作したプロジェクターを披露する。また、同年の10月から11月にかけてオーストリア＝グラーツ出身のシャルル・クラッセが、工業都市マーリボアやスロヴェニアの中心地で映写会を開いた。1897年以降はシネマトグラフの巡回もザグレブ、リュブリアナ、サライエボ、スポディツァなどに広がるが、辺境の地モンテネグロとトルコ支配下のマケドニアでは1910年頃まで映画が導入されなかった。⁽²⁸⁾

ベオグラード大学の教授コサノヴィツァ・デジャンは自国におけるリュミエール映画の受容について綿密な考証を行っている。セルビア等でのシネマトグラフ興行が、バルカン半島の諸民族を世界的な視野へ導いた、とこの研究者は結論する。

ベオグラードの人々のために映画が世界への新しい窓を初めて開いてくれた。〈黄金の十字架〉で開陳された魔術的なスクリーンで彼らはフランスを〈ありのままに〉見た。パリの『オペラ座広場』、『マルセイユの魚市場』、フランスの海岸における『海水浴』、フランス人による『壁の取り壊し』、『ラ・シオタ駅へのフランス列車の到着』。遙か遠くと思われたフランスが、いまやこれほど接近して、白いスクリーンのうえて躍動し、手で触れるほどである。一步踏み込めば、私たち自身がパリのオペラ座広場やマルセイユの魚市場を逍遙できる。カレよ、あなたに感謝したい。

1902年にリュブリアナの住民はフランスの精華を視聴する。偉大なサラ・ベルナールが『ハムレット』の台詞を語り、喜劇俳優コークランが『シラノ・ド・ベルジュラック』の独白を呟いたわけである。この映像を提供したパリ＝レコード・シネマ劇団は、2日間だけこの都市に滞在した。フランス演劇の天才が示す身振りや言葉に、リュブリアナの観客は完全に魅了される。世界中で多くの映画を製作したフェリックス・メギッシュが、魔術的な器械によってこれらの天才に永遠の生命を与えたことを、観客は疑わなかった。⁽²⁹⁾

1900年にセルビアの国王は周囲の反対を押し切って、素性に悪評のある女官ドラガ・マシンと結婚し、宮廷を混乱と暗闘の巷とした。1903年3月セルビアの民衆は決起して独裁体制の強化を阻止し、さらに6月〈黒手組〉と名のる将校の一团が国王アレクザンドルと王妃ドラガを殺害した。パテ・フレール社の有力な映画監督リュシアン・ノンジェは、このクーデターを題材として『セルビア王家の暗殺』を製作し、人気女優ネリー・コルモン

が数奇な王妃の運命を演じた。また、同年8月マケドニアの圧制に対して民衆が蜂起し、トルコの軍隊がこれを鎮圧すると、同じくパテ・フレール社で『マケドニア人虐殺』が撮影される。これらの作品はセルビア以外の各国で上映され、バルカン半島の陰惨な政情を広く世界に認識させた。なお、同社の名作『ギーズ公の暗殺』はセルビア宮廷の惨劇を連想させるが、1909年1月ベオグラードのパリ劇場で上映された。⁽³⁰⁾

IV ロシアにおけるリュミエール映画の受容

1896年5月ロシア皇帝ニコライ二世の戴冠式を期して、ザンクト・ペテルスブルクとモスクワへは映画興行のさまざまな開拓者が集まってきた。こうした競合の機先を制し、シネマトグラフの一般公開が、5月17日ザンクト・ペテルスブルクで行われる。当日首都の夏季劇場〈水族館〉では演劇『ザンクト・ペテルスブルクにおけるアルフレッド・パシャ』が供されていたが、その第3幕に先だってリュミエール映画の『列車の到着』、『カルタ遊び』、『子どもの喧嘩』、『海水浴』などが映写された。⁽³¹⁾

ついで5月19日よりリュミエール映写技師団は首都の目抜きネフスキー大通り46番地にロシア最初の映画館を開設した。すでにイギリスの興行師ロバート・ポールは5月4日にアニマトグラフを見せると予告したが、実際に彼の発明は5月26日動物園劇場で公開された。エディソン製作によるキネトホーンも同月末にモスクワの夏季劇場〈エルミタージュ〉で披露され、ついでザンクト・ペテルスブルクでも観客を集めた。ムソルグスキーとリムスキー・コルサコフを擁護した芸術史家ウラジミール・スターソフも、これらの映写にみずから赴き、新たな表現様式の出現に注目した。⁽³²⁾1896年5月30日弟ディミトリに宛てた書翰のなかで、彼はキネトホーンとシネマトグラフの双方を熱烈に称讃する。

〈活動写真〉、すなわち天才エディソンの驚嘆すべき新発明を月曜日に見て、どれほど大きな喜びを私は感じたことでしょうか。連れていってくれたのはグラズノフです。すでに彼はひとりで見ており、彼の熱狂に動かされて私も行きました。まさしく類例のないものです。私たちの知識のなかにこれまであったいかなる事物とも似ていません。実際にこれは私たちの時代以前にありえなかったものです。グラズノフと私は完全に魅了され、終わりにには大声で喝采しました。「エディソン万歳！」〔中略〕

当然のことながら、まだ完璧なものではありません。しばしば人物や背景がぼんやりしたり、揺れ動いたりします。だが、このような快挙を愚か者はどのように非難するのでしょうか。水平線に現われた一連の列車が、私たちのほうに驚進し、スクリーンを引き裂くかと思われるとき、『アンナ・カレーニナ』の同じ場面を私たちの心はただちに想起します。信じられないほどの迫力です。さまざまな荷物を携えて、乗客が車両から降り、これをプラットフォームの群衆が見詰めます。まもなく群衆は散り、人々は平常の歩みに帰るのです。これほど躍動的な群衆が見られるのでしょうか。〔中略〕さらに驚嘆すべきものがあります。鍛冶屋が仕事をしています。どんな具合に仕事をしているか、厳密に検討できるのです。肩や腕の微妙な動きも観察できます。なんと奇蹟的な映像でしょう。

なおまた、私たちの座席の前に海原が広がります。メンデルスゾーンが表現した海の静けさ。まさしくその映像は銀色に反射しつつ、独特の音楽を奏でるのです。⁽³³⁾ アムステルダム、ミュンヘン、ベルリンを巡回したリュミエール社の映写技師フランシ

ス・ドゥブリエは、この時期にザンクト・ペテルスブルクとモスクワに滞在した。同社の主任技師シャルル・モワッソンとその地で合流し、なによりニコライ二世の戴冠式を撮影するためである。この式典は1896年5月14日(ロシア旧暦によれば5月26日)、古式に則ってモスクワのクレムリン宮殿で挙行された。シネマトグラフについてはフランス大使館の懇請により宮殿内での使用が許可され、特別の台座も設けられる。こうしてドゥブリエとモワッソンは戴冠式の撮影を順調に進め、ロシアにおける最初のフィルムが製作された。

『ロシア皇帝ニコライ二世の戴冠式』と総称されるこの作品は、『戴冠式に参列する各国の君主と来賓』、『儀装馬車における皇太后とユーゼーヌ大公妃』、『ウスペンスキー寺院に入るロシア皇帝とロシア皇后』、『モスクワのタワースカイ街』などの連作からなり、小さなセルロイドの巻軸に収められ、ただちにフランスへ発送された。⁽³⁴⁾

ついで5月19日には新しい皇帝をロシア国民に披露する式典が催された。この日会場とされたモスクワ近郊コデンカ平原では50万人の群衆が皇帝の来駕を待ち受けた。ここでドゥブリエとモワッソンはシネマトグラフ撮影に関して初めて官権の干渉を経験する。⁽³⁵⁾ 大著『映画—ロシア=ソヴィエト映画史』を執筆したジェー・レーダは、多くの聴き取りを行っているが、ドゥブリエからも痛切な撮影秘話を採取した。

式典は終日行なわれ、人々が早くから皇帝を待つと聞いたので、私たちも朝の8時にはそこに着いた。予定の時刻より前に記念品が配布され始めたのを見て、私は黒山のような群衆を掻き分け、50メートルほど先の仮小屋へ行った。そこから引き返そうとするや、待ちくたびれた群衆の間で騒ぎが始まった。そして、自分のカメラから8メートルほどのところへ来ると、鋭い叫び声が背後に聞え、すぐさまパニック状態となった。私も隣の人の肩にすがり、震え上がる群衆を押し分けて進んだ。その8メートルが数キロメートルにも思われた。〔中略〕ふたつの池を囲った欄干も倒壊し、池や溝の水中に100人もの犠牲者が墜落する。それに続いたパニックでさらに数千もの犠牲者が踏み付けられて死んだ。ようやく私たちは正気を取り戻し、仰天すべきこの光景を撮影することができた。18メートルの巻フィルムを私たちは5個か6個携えてきた。これとはまったく異なる光景を写すつもりであったのに、怒鳴ったり、殴り合い、皇帝の台座のもとで死ぬ大衆を、それらの3個で撮影した。警官が人々を叱責し、群衆の渦潮を止めようとしているのも見えた。私たちの周囲も人々で一杯だった。2時間ほど経ってようやく私たちは、踏み裂かれた死体が散乱する場を離れようとした。そのとき警官が幽かに合図をして、私たちを逮捕し、すでに捕らえられた目撃者や新聞記者と一緒にした。私たちの装備はすべて押収された。私たちの貴重なカメラをふたたび見ることはなかった。そうした器械によって嫌疑を招いたからである。私たちは尋問を受けて拘留され、その夕刻ようやくフランス大使館が介入して、身柄を引き取ってくれた。⁽³⁶⁾

ドゥブリエとモワッソンは一週間後にロシアを去るが、引き続きいくつかの都市でシネマトグラフの興行が企画される。同年6月22日からはヴォルガ河流域のニージニ=ノヴゴロドで伝統あるフェスティヴァルが催され、ロシア人、タタール人、カザフ人、グルジア人、トルコ人などさまざまな民族で賑わった。この会場で『列車の到着』などリュミエール映画に接したマキシム・ゴーリキーは、音も色もない陰影の世界に驚きつつ、シネマトグラフの圧倒的な迫力をオデッサの新聞に以下のように書いた。⁽³⁷⁾

誇張を怖れずに言えば、刺激的な斬新さを有するゆえに、この発明は広範な用途を持つと予言できよう。だが、莫大な精力の消費が必要であるのに、どのような成果がこれから期待できるか。観客をきわめて緊張させるのに、この発明にふさわしい目的や用途が見つかるだろうか。一層重大な問題も潜んでいる。私たちの神経は次第に弱く、鈍くなっていく。日常生活のありふれた印象に、私たちの反応は鈍感になるばかりである。私たちは種々の強烈な感覚を新たに覚えることで、変わっていく。シネマトグラフはそれらすべてを私たちに与える。一方では私たちの神経を開発し、他方ではそれを鈍化させるわけである。シネマトグラフによって喚起される異常で幻想的な感覚への渴望は、私たちのうちで次第に大きくなり、普通の生活における平凡な印象にますます鈍感にも冷淡にもなっていく。異常なものと新奇なものへの渴望が、私たちを遠くに、きわめて遠くに運び、死のサロンは19世紀のパリから20世紀のモスクワへと向かうであろう。⁽³⁸⁾

ゴリキーの評言は人類における認識の発展や個人の心理学的な変容との関連で、映画の創出を把握したものとして注目される。因みに文学者レフ・トルストイも早くからこの新しい表現形態に関心を寄せ、映画の出現に対処して文学のありかたを根底から問いなおすように訴えた。つぎの訳文は1908年80歳の誕生日を迎えたトルストイの談話である。

あなたもお判りのように、カチカチと音をたてて回るこの小さな器械が、私たちの人生、文学者の人生を変革しました。文学の古い方式にそれが直接攻撃を加えたのです。見世物師に操られる陰影のスクリーン、情念をもたぬこの小さな器械に私たちは適応せねばなりません。新しい叙述の様式が必要なのです。この問題について私は多くを考え、起こるべきことを予見したように思います。〔中略〕

『生ける屍』を執筆したとき、たえず私は自分の髪を引き抜き、自分の手足を痛めつけていました。真に迫った光景や表象を盛り込むため、ある出来事をほかの出来事へいち早く転換させるためにです。芝居の習性は棍棒のように芸術家の喉を抑えつけます。舞台特有の次元や制約に合わせるため、自分の作品から一切の生命と動きを余儀なく剥奪したことを、私は想起します。〔中略〕

しかし、映画が現われました。驚異的なものがここにあります。さあ、舞台が準備されました。ほかの舞台への転換も容易です。私たちは海、丘、都市、宮殿を備え、そうした宮殿で悲劇を演出できるのです。いかなる宮殿にも悲劇が潜む、というシェイクスピアの言葉も使いたくなります。

映画のためひとつの脚本を書くよう、真剣に私は考えました。主題も見つけました。恐ろしく血腥いテーマです。そのようなテーマも私を怖れさせません。たとえば聖書やホメロスを読んでください。そのような主題が充満しています。殺人や戦争。にもかかわらず、それらは人類の神聖な書物なのです。⁽³⁹⁾

V ウクライナおよびグルジアにおけるリュミエール映画の受容

リュミエール社の映写技師マリウス・シャピイスが、東ヨーロッパ巡回のためリヨンを出発したのは、1896年5月24日である。17歳のシャピイスはこの日から克明に旅行日誌を書き綴った。兄ピエールと姉リュシィもリュミエールの映画技師団に参加しており、こうした家族にも彼は旅先からしばしば手紙を送る。同月27日にドイツ＝ロシアの国境を越え、

ロシア帝国の版図ワルシャワに着いた。しかし、その地ではシネマトグラフ興行の条件が得られず、予定を変更して6月11日ザンクト・ペテルスブルクに到着した。ネフスキー大通りの映画館などでしばらく仕事をしたシャピイスは、1896年の8月他の映写技師とともにロシア帝国を構成する諸地域、ウクライナ、グルジア、タタール等へのシネマトグラフ巡回に出発する。リトー＝ユティネの著作に収録された彼の『ロシア旅行ノート』は、そのような映写技師団の足跡を語る貴重な証言である。⁽⁴⁰⁾

4名のうちふたりがオデッサに出発する手筈となった。2日がかりの鉄道列車で8月15日に出発したのはドゥコールである。私たちはモスクワを通れず、ヴィルマを通った。美人のマルグレットが同行し、楽しい旅になった。8月17日の20時にオデッサに着いて、グランド・ホテルに投宿し、映写会場が設置されるまで2週間待つ。不安な気持ちにもなったが、その建物は9月に完成した。ホテルに滞在している間、私たちは毎タコンサートに行き、昼間は市中や〈小さな泉〉を散歩したり、黒海で水浴をした。その会場では9月6日に最初の上映を行った。⁽⁴¹⁾

こうしてシャピイスは黒海の港町オデッサを拠点にしながら、翌年の2月中旬までにウクライナの多くの都市、キエフをはじめ、ニコラエフ、フェルソン、カルコフ、キティネフ、チェルニコフなどでシネマトグラフを公開した。彼のほかこの巡回に参加したのは、ロシアにおけるリュミエール社受託人アルトゥール・グリュンヴァルト、マルセイユ出身の映写技師ポール・デコール、グリュンヴァルトに雇用されたふたりの映写技師、ペルミサおよびクラインである。⁽⁴²⁾1897年4月シャピイスはコサックの居住地エカテリノーダルやノヴォチェルカスクを訪れ、さらにはコーカサス山脈の麓へ旅した。黒海東端のロストフからグルジアの古都トビリシへの道程は独得の風土と習俗に包まれ、彼の『ロシア旅行ノート』も精彩を放っている。⁽⁴³⁾

4月3日(土)の20時に私たちはロストフを去り、ヴラディコーカサスに向かった。列車旅はいつも同じようなものだが、今回の旅行では景色がほかの地方と異なっていた。山岳部に入って、村落もまばらとなり、羊、山羊、牛、水牛などの群が眺められた。翌日19時にヴラディコーカサスに着く。列車で23時間かかった。ホテル・ヨーロッパに寄ったが、すこし用意を整え、食事だけ済ませて、同じ晩に馬車でトビリシへ出発する。〔中略〕翌朝5時に私たちは雪に囲まれているのを知った。雨はやんでいる。カズベックに着いてお茶を頂き、リヨンへ葉書を送る。まもなく旅を再開し、6頭の馬を伴って山を登り始めた。登れば登るほど、雪が深くなる。〔中略〕山を下ると雪はやみ、登っていくとまた降った。4月6日(火)の午前3時に私たちはトビリシに到着し、ホテル・オリエントに投宿する。来れてよかった、と安眠できた。馬車のなかで連続29時間過ごし、カズベックで半時間と途上の食事に1時間を費やした。そして、43頭の馬、12頭替え馬を必要とした。トビリシはロシアの都会となんら似ていない。山のなかにあり、人口も多様である。コーカサスもひとつの民族であるが、ほかにアルメニア人もグルジア人もいる。習俗も同一でなく、住民はみな武装している。〔中略〕ある日ひとりの婦人とニツケットへ行き、グルジア風のきわめて古い聖堂を訪れた。その古さはとくに人目を惹き、タタール人に損傷された内部の絵は興味深いものであった。タタール人の馬が皇帝の墓石を踏み碎いたと言う。手際よく聖職者が私たちすべてをみせ、すべてを説明してくれた。そのあと町に帰り、大佐の家で食事をし、

夕べを楽しんだ。劇場で幾度か映写会を催したが、トゥトゥールが急に不平を言い出し、ひとりで行うしかなかった。⁽⁴⁴⁾

【 註 】

筆者が参照した主要な書物は、本稿において下記の略号で示される。

- Cl* : Bernard CHARDERE, *Les Lumières*, Lausanne, Payot Lausanne, 1985.
Dhc : Jacques DESLANDES, *Histoire comparée du cinéma*, Tournai-Paris, Casterman, 1966. 2 volumes.
Fk : Walter FRITZ, *Kino in Österreich, Der Stummfilm 1896-1930*, Österreichischer Bundesverlag, Wien, 1981.
Iw : ISTVAN Nemeskurty, *Word and Image, History of the Hungarian Cinema*, translated by Zsuzsanna H. and Fred Macnicol, Budapest, Zrinyi Printing House, 1974.
Kc : Dejan KOSANOVIC et Ranko MUNITIE, *Le Cinéma yougoslave*, Paris, Centre Georges Pompidou, 1986.
Lk : Jay LEYDA, *Kino, Histoire du cinéma russe et soviétique*, traduit par Claude-Henri Rochat, Paris, L'Age de d'homme, 1976.
Ra : Jacques RITTAUD-HUTINET, *Auguste et Louis Lumière, les 1000 premiers films*, Paris, Philippe Sers Editeur, 1990.
Rc : Jacques RITTAUD-HUTINET, *Le Cinéma des origines, les frères Lumière et leurs opérateurs*, Seyssel, Champ Vallon, 1985.
Slm : Georges SADOUL, *Lumière et Méliès*, Paris, Lherminier, 1985.

- (1) Robert WAISSENBERGER, *Vienna 1890-1920*, Alpine Fine Arts Collection Ltd, 1984. pp.9-18, 99- . W. M. ジョンストン著, 井上修一ほか訳『ウィーン精神—ハプスブルク帝国の思想と社会』みすず書房, 1986年。第1巻, pp. 192-229.
(2) *Fk*, S. 11.
(3) WAISSENBERGER, *op. cit.*, S. 70-75. シュテファン・ツヴァイク著, 原田義人訳『昨日の世界』みすず書房, 1973年。第1巻, pp. 68-73.
(4) Programm der ersten Filmvorführung in *Fk*, S. 12.
(5) *Fk*, S. 11-12.
(6) WAISSENBERGER, *op. cit.*, S. 47-48. ツヴァイク著, 前掲, 第1巻, pp. 151-153.
(7) *Neue Freie Presse* Nr. 11368, 17. 4. (1896). S. 1. in *Fk*, S. 13-15.
(8) WAISSENBERGER, *op. cit.*, S. 49-51. ジョンストン著, 前掲. pp. 48-56.
(9) *Fk*, p. 12.
(10) *Fk*, S. 15. *Slm*, p. 130. *Rc*, p. 232. *Ra*, p. 161.
(11) *Fk*, S. 15-18.
(12) Arthur GENI, *Entstehung des Kinematographen*. Unveröffentlicht. in *Fk*, S. 17-18.
(13) *Fk*, S. 18.
(14) *Fk*, S. 21.
(15) 矢田俊隆編『東欧史』山川出版社, 1977年。pp. 38-40, 146-148, 233-244. バムレーニ・エルヴィン編, 田代文雄ほか訳『ハンガリー史』恒文社, 1980年。第2巻。pp. 40-51.
(16) ジョン・ルカーチ著, 早稲田みか訳『ブダペストの世紀末—都市と文化の歴史的肖像』白水社, 1991年。

- pp. 69-71, 94-96. 栗本慎一郎著『ブダペスト物語—現代思想の源流をたずねて』晶文社, 1982年。pp. 79-81, 90-92, 238-241.
- (17) バムレーニ編, 前掲。第2巻。pp. 101-104. ルカーチ著, 前掲。pp. 96-98, 155-156, 224-225.
- (18) *Slm*, p. 130. *Ra*, p.164. *Rc*, pp. 151-230.
- (19) *Iw*, p. 12.
- (20) *Iw*, p. 12.
- (21) ルカーチ著, 前掲。pp. 186-191, 224-225. 栗本慎一郎著, 前掲。p. 143.
- (22) *Iw*, pp. 9-10.
- (23) *Iw*, pp. 12-13. ルカーチ著, 前掲。pp. 225, 307, 311.
- (24) マルセル・ドゥ・ヴォス著, 山本俊朗訳『ユーゴスラビア史』白水社, 1972年。pp. 97-108. スティーヴン・クリソルド編, 田中一生ほか訳『ユーゴスラヴィア史』恒文社, 1980年。pp. 85-86, 97-98, 134-138, 154-158. 矢田俊隆編, 前掲。pp. 183-188, 202-208, 215-217.
- (25) *Rc*, pp. 137, 229. *Kc*, pp. 13, 43.
- (26) *Male novie*, le 7 juin 1896. cité dans *Kc*, p. 105.
- (27) *Rc*, pp. 136-139. *Kc*, pp. 13, 43. *Slm*, p. 134.
- (28) *Kc*, pp. 13, 43.
- (29) *Kc*, p. 105.
- (30) ヴォス著, 前掲。pp. 100, 111-112. クリソルド編, 前掲。pp. 138, 158, *Kc*, pp. 14, 43, 105-106.
- (31) *Lk*, p. 21.
- (32) *Lk*, pp. 21-22. この日ドゥブリエとモワッソンはモスクワに滞在しているが、だれがペテルスブルクでの初公開を実施したかは詳らかでない。
- (33) *Lk*, p. 22.
- (34) *Lk*, pp. 23, 469. *Rc*, p. 151-153. *Slm*, p. 130. *Ra*, pp. 92, 186-167. 『モスクワのタワースカイ街』については本稿前回の写真図版を参照のこと。
- (35) *Lk*, p. 23.
- (36) *Lk*, p. 23-24. レーダの調査によれば, この大惨事がロシアの新聞では一切報道されなかった。
- (37) *Lk*, pp. 24-25, 472-474.
- (38) Maxime GORKI, Article. cité dans *Lk*, pp. 25. なお, 同じ時点でゴーリキーは地元の新聞『ニジゴロドシュトック』につぎのような一文を寄稿する。「昨夜私は陰影の王国にいた。この世でかくも奇妙なものを思い描けるであろうか。色も音もない世界である。大地, 水と大気, 樹々や人々。これらすべてが単調な灰色だけで描かれる。灰色の空に灰色の陽光。灰色の顔に灰色の瞳。炭のように灰色な木の葉。生はなく, 生の影だけである。生命の動きはあるが, 啞の幽霊が動いている。」(GORKI, Article. dans *Lk*, p. 472.)
- (39) Léon TOLSTOI, Une conversation avec J. Tenerama. dans *Lk*, p. 475.
- (40) *Rc*, p. 73. Marius CHAPUIS, Carnet de voyage en Russie. dans *Rc*, p. 242.
- (41) Marius CHAPUIS, *op.*, cit.. p. 242-243.
- (42) CHAPUIS, *op. cit.*, pp. 243-244. *Rc*, pp. 232, 233, 235.
- (43) CHAPUIS, *op. cit.*, pp. 244-245.
- (44) CHAPUIS, *op. cit.*, p. 245. なお, シャピイスの『ロシア旅行ノート』にはコーカサスでコサック騎兵を写そうと試みたことが記載され, そのほか各地でシネマトグラフの撮影を行ったと思われるが, この

時期におけるシャピイスの作品が現存のリュミエール映画目録には見当たらない。(CHAPUIS, *op. cit.*, p. 245.)

(平成6年9月10日受理)